

# 小学校教員の求める英語活動について —積み重ね型カリキュラムを用いた指導と学級担任へのインタビュー調査を通して—

伊藤 摂子

## 要旨

2011年度から必修化された小学校外国語活動ではその指導者は主に学級担任であるとされているが、多くの小学校教員は英語指導の専門家ではない。そして指導教材の補助として『英語ノート』が配布され、2012年度からは新しい*Hi, friends!*が『英語ノート』に代わり各小学校へ配布されている。これらの教材は英語教育という観点からみるとその指導内容がバラバラで前後の関連性が薄い。そこで英語教育の観点から指導内容を検討した中学校英語教育につながるような積み重ね型カリキュラムを実施し、その指導を担当した学級担任が、自治体や学校で独自のカリキュラムを用いた場合やこの積み重ね型カリキュラムを用いた場合と副教材とを比較をしてどう考えているのかインタビューを行い、小学校教員が現在の英語活動をどのように考えているのか、今後どのようにしていくとよいと考えているのかを調査を通して明らかにすることが本研究の目的である。

**キーワード：**カリキュラム, 指導案, 積み重ね, 学級担任, 小学校英語

## 1. はじめに

小学校外国語活動では学級担任が英語活動を指導するにあたり（以下、実際の活動名としての外国語活動と英語活動という言葉については、その2つが混在しないように英語活動と表記を統一する。小学校外国語活動という名称での表記はそのままとする）、その指導の補助として『英語ノート』が配布され、2012年度からは*Hi, friends!*となり、名称と内容が改訂された。これらは副教材であり、必ずしもこれらを使って英語活動を行う必要はない。『英語ノート』や*Hi, friends!*をそのまま使用せず教員が指導内容を考える、あるいは自治体全体で独自のカリキュラムを持って実施しているところもあり、学校や自治体の裁量で別の教材等を用いての指導も可能である。また低中学年も含めると、指導時間数や英語活動を進める際の補助教員の配置なども学校や自治体で異なる。この小学校外国語活動ではその学習指導要領に、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国

語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と掲げられており、英語を体験させるということを最大の目的として活動が導入された。文部科学省から配布された副教材は、その内容と扱うキーセンテンスがアラカルトのように單元ごとに異なっていて（巻末 appendix 1 参照）、英語教育という観点から教材を検討するとその指導内容の目的がはっきりとしない。そこで、英語教育としての目標を織り込み、体験的に英語に触れさせるだけではなく次学年へと繋がり、中学校の英語教育へ繋がる基礎の一部になるように指導内容を検討した積み重ね型カリキュラムを作成した。これを用いて英語活動を行い、小学校外国語活動においてこのような積み重ね型カリキュラムを用いる有用性について学級担任がどのように考えるのか、また小学校外国語活動をどのように考えているのか、インタビュー調査を通して学級担任の求める英語活動の内容を明らかにする。

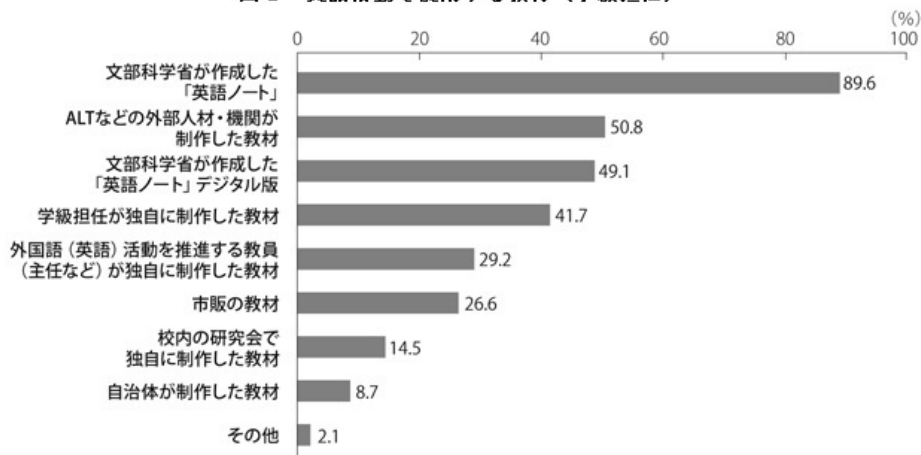
## 2. 小学校での外国語(英語)活動

### 2. 1 指導内容

小学校外国語活動は学習指導要領に書かれているように原則英語を扱うことになっており、その英語活動では、文部科学省から副読本として平成 21 から 23 年度までは『英語ノート』が、平成 24 年度は *Hi, friends!* が配布された。その内容は巻末 appendix 1 の表 1~4 を見てもわかるように、挨拶や身の回りの物等、小学生の児童が親しみやすい場面等を取り上げている。各単元は 3~4 時間の指導が標準とされているが、指導者の指導計画や内容によっては標準以上の時間を設定することも可能である。またこれらは教科書ではないため、この教材を使用しなければならないというわけではない。学校や自治体、学級担任のアイデアや指導したい内容が明確であれば、これらの副教材以外のものや、または副教材の一部のみを活用ということも可能である。しかし英語教育の専門家ではない学級担任や英語担当教員の場合、これらの副教材以外の教材を作成して使用する、または副教材を指導内容の一部として活用しようとする場合、独自でどの程度の時間を各単元に割り当て、『英語ノート』や *Hi, friends!* の内容を吟味したうえで指導内容を調整し変更することは容易ではない。Benesse による 2010 年の第 2 回小学校英語に関する基本調査（教員調査）から（次ページの図 1 参照）、多くの学校では『英語ノート』を使用していることが見て取れる。これら副教材は、『英語ノート』、*Hi, friends!* どちらも挨拶から始まり、感情や様子を扱う内容を *I am ~. (I'm ~.)* という表現を用いて活動を行い、そして数の単元に移っていく。数の単元である 5 年のレッスン 3 の前に扱った *I am ~. (I'm ~.)* という表現は、小学校の英語活動ではその後目標の英文として出てくることは無く、*happy* のような表現もこの単元で出てくるだけである。レッスン 3 の *How many ~?* の表現もこの単元後は出てくることは無く、数を数える活動として鉛筆や筆箱等の名詞に触れているが、それらの言葉もその後の英語活動では取り上げられていない。これ

を見てわかるように、各単元間のつながりや関わりが非常に薄く、3, 4時間で1つの単元課題を終えると次は全く異なる英語内容を扱うことが多い。

図1 英語活動で使用する教材〈学級担任〉



注) 複数回答。(Benesse 2011)

小学校外国語活動は、総合的な学習の時間に導入された当初は指導時間が年間に2, 3時間程度から十数時間と学校間での差が大きく、数時間程度しかない学校は英語を使った単発的な遊びや活動、あるいは外国のゲストを招き自国での様子を英語や日本語で伝えてもらう等の活動であった。それが、指導時間が増えるに従いそのまま単発的な活動の種類を増やしていく形で様々な場面を取り上げて英語を使ってみる、という活動になっていった。指導内容は英語活動の補助教員(ALT (Assistant Language Teacher) やJTE (Japanese Teacher of English) 等)が指導時間に合わせて数時間でひとまとまり、あるいは毎時間別の指導内容にする計画を立てるところが多く、担任は児童と一緒に参加する形が主流であった。補助教員がいない学校では学級担任がトピックや場面を考え、指導内容の作成を担当していた。その流れの中で、指導時間がバラバラだったことと、年間を通しての計画や学校全体を通しての指導内容を英語教育の専門家ではない学級担任が計画する難しさがあったということもあり、3, 4時間を1つのまとまりとしてトピックや場面を取り上げ、そこで扱う英語を紹介して活動を進める、という3, 4時間で1単元という英語活動が中心となった。このような単元ごとの活動は英文だけではなく扱っている単語についても繰り返しということはあまり強く意識されていない。もちろん指導者の裁量で以前の単元で扱われた単語等を指導書の指示にはなくても取り上げ、復習をしながら以前の学習内容を活用することは可能ではある。副教材の音声を使った活動の中には、既習内容を取り上げ、活動の中で以前触れた英文や英単語を扱っているものもあるが、それは指導内容の指導目標ではなく音声教材などで表現を膨らませる、自己紹介の英文などでキーセンテンスが別にある中で既習の英文も入っているということで、

指導目標は別の新しい英文である。このことから各単元間のつながりは薄く、5、6年の2年間の英語活動全体を英語教育という観点で検討したということではなく、小学生の児童に英語を体験させる場面設定を中心とした教材であるということが、この『英語ノート』、*Hi, friends!*の内容からわかる。

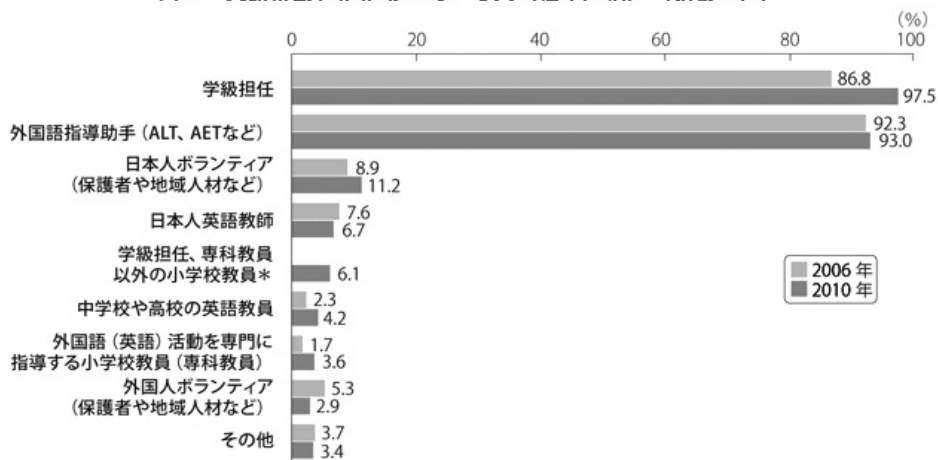
またこの副教材の指導書において、『英語ノート』では小学生の児童には難易度が高過ぎるのではないかと思われる指導者の英語表現例も多く表示されていた。例えば『英語ノート』1 Lesson 8 の第2時に、児童への質問として“*What subject do you study first period on Monday?*”という英文がある。この Lesson 8 で児童は初めて曜日と教科名に触れる。1、2時間程度では全て覚えることは困難な曜日名、さらには*first*などの序数、*subject*や*period*等その他の新出語も多く、質問の意味を理解するのは困難である。指導者が多少のヒントを児童に与え、英語が得意な児童がいたとしても、英語活動の中で扱う英語表現としてはこれが適切かどうかは大きな疑問である。その他にも『英語ノート』1 の Lesson 1 では“*When you hear the key word, shake hands and say, ‘Hello.’*”のような表現例が5年最初の単元で紹介されている。そもそも学級担任がそれだけの英語を駆使できるのかという疑問も挙がる。しかしその後の新教材、*Hi, friends!*ではその点が改善され、指導者が用いる英語表現例では難しいものはほとんど削除され、児童の英語活動の中で比較的短くわかりやすい表現を提示するようになった。質問の中で用いられる英語も、できるだけ英語活動の中で出てくる英単語、短い英語フレーズや英文で構成されており、指導者の表現例も『英語ノート』の時のような明らかな疑問を抱くようなものは提示されていない。このように指導者側の英語表現については以前の『英語ノート』と新教材の*Hi, friends!*では大きな変化が見られるが、児童が触れる英文や英単語等については巻末 appendix 1 表1~4のように、『英語ノート』と*Hi, friends!*の間で大きな変化は見られない。

## 2. 2 学級担任の役割

小学校学習指導要領の第4章外国語活動の第3指導計画の作成と内容の取扱いにおける1の(5)において「指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施にあたっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること。」とあり、小学校外国語活動の指導内容に関しては小学校の教員が作成することとされている。しかし小学校教員は英語の専門家でないことが多く、英語学習自体を不得意とする者もあり、『英語ノート』や新教材の*Hi, friends!*を用いたとしても、教員が学習内容を考え、指導計画を立てることは容易とは言い難いのが現状である。そのため英語活動の補助教員(ALTやJTE等)がいる学校では、現在でもこの補助教員が指導内容を準備しているところもある。図2~4はBenesseの2010年の調査におけるデータであるが、これらを見ると、英語活動に関わっている指導者は

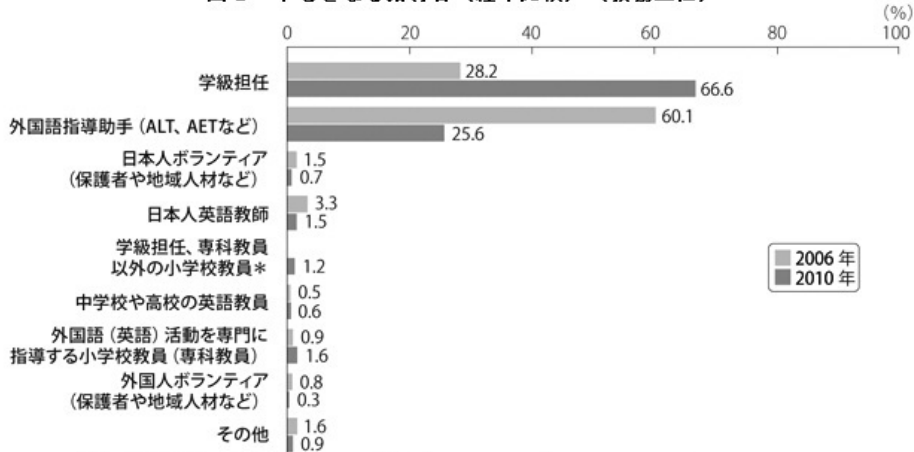
学級担任と外国語指導助手がともに9割を超え、その他として日本人英語教師やその他の教員、ボランティア等となっていることがわかる。また、中心となる指導者として一番多いのが学級担任の66%、次いで外国語指導助手の約25%となっている。

図2 英語活動にかかわっている人（経年比較）（教務主任）



注) 複数回答。英語活動を「行っている」学校 (2006年n=3,292、2010年n=2,374) (Benesse 2011)

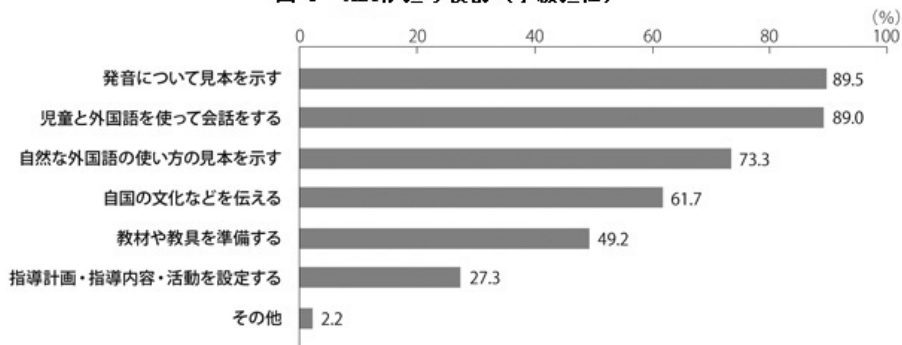
図3 中心となる指導者（経年比較）（教務主任）



注) 英語活動を「行っている」学校 (2006年n=3,29) (Benesse 2011)

しかし、図4の学級担任に対しての調査において、ALTが担う役割として挙げられているのが教材や教具の準備が約50%、指導計画や内容の設定が27%と、本来学級担任や英語担当教員が担うべき役割をALTが担っていることがわかる。これは前述のように、小学校英語の指導計画を、英語指導の訓練をほとんど受けていない小学校教員が作成しなければならないということと大きく関わっており、英語教育においては素人の教員が指導内容を考えなければならないという難しさからきている。このため、学級担任よりも英語に関しては知識や指導内容、方法を知っているALTやJTEに頼ることになる。

図4 ALTが担う役割〈学級担任〉



注1) 複数回答。(Benesse 2011)

このようなことから学級担任の役割としては、指導内容やその計画についてはALTやJTEに任せたり相談したりして進め、英語活動の時間においては担任がT1（主たる指導者）として指導者の中心となる。またALTとの打ち合わせ時間が無かったり、打ち合わせする際に英語力不足から意思の疎通が十分図られないこともあり、その場合は学級担任の役割が児童と一緒に参加することにとどまったり、ALTやJTEがT1として指導し、担任がT2（補助教員）として英語活動を進めるということもある。

### 3. 研究の方法

#### 3. 1 積み重ね型カリキュラム

副教材として用いられている『英語ノート』や*Hi, friends!*は指導内容に関しては各単元間での関連が薄く、英語教育という観点から考えた場合果たしてそのような指導内容でよいのか、という疑問が湧く。小学校外国語活動は体験的に理解を深めるということから、『英語ノート』等の副教材は場面設定に重きを置いている。しかし英文や英単語等、扱う英語そのものについて何を扱うのが適切か、どのような流れで内容を検討するか、中学英語との連携をどのようにしていくべきなのか、英語教育の観点からの小学校外国語活動で扱う適切な英語はどのようなものかについては、前述したように各単元間でのつながりの薄さを考えるとそれらの検討は十分とは言えない。そこで、英語活動で扱う英文はどのようなものが良いのか、中学校英語へ繋がる基礎となる英文は何を扱うとよいのか、また取り上げる英単語は小学生児童の身のまわりの物としているがそれらはいったいどのようなものなのか、これらの点を検討しその検討内容を織り込んだ独自の積み重ね型カリキュラム（Appendix 2 参照）を作成した。そして小学校外国語活動の中で研究協力校の5, 6年生児童に対しそのカリキュラムを用いて2年間の英語活動を実施した。

このカリキュラムそのものは10年以上の小学校現場における指導経験をもとに、児童の反応や学級担任の指導のしやすさを考慮し少しずつ作成したものである。総合的な学

習時間における小学校外国語活動開始の頃からその学年における指導内容を簡単な指導計画表として作成し、当時は場面シラバスのようなトピック中心の指導を行っていた。しかし、場面やトピックで扱うキーセンテンスが数回で変わってしまうと、英語活動を通して英語を声に出す楽しさや自信を得た英語フレーズが小学校卒業時には児童にほとんど残らないことがわかり、2003年度からゲームや歌等の活動方法や指導の手順等は大きく変更はせず、まず前後のつながりや復習が絡み合うようにその指導順（キーセンテンスを含むトピック）を並び替え、その後扱うキーセンテンスやトピックを絞り込んでいき、内容を改訂した。小学校の英語活動の中でよく用いられる場面や英文の中から、特に中学校に向けて小学校で触れておきたい英文を取り上げ、その英文をおうむ返しで繰り返させる活動ではなく、文構造の類似性（SVO等）も考慮して児童がより音声に親しみ、音としての慣れや音以外の興味と気づきへと繋がるように英文を絞り込んだ。『英語ノート』にもあるように、一つの単元は3、4時間程度が一般的な小学校外国語活動であるが、扱うキーセンテンスや単語によっては4時間では十分なやり取りの活動が難しいと考えられたため、このカリキュラムは取り上げるトピックや英文によって、6～7時間、前後合わせて10時間以上（1つの学期間）という活動もある。このカリキュラムの土台は自身の指導経験を基に作成したものであるが、その後この土台を基に毎年指導内容や指導案について学級担任の意見を取り入れて指導しやすいように改訂し、中学校教員もこのカリキュラムについて実際の授業の観察と指導案検討に参加し、内容等の改訂を行った。

さらに英語科の小中連携における、小学校学級担任、中学校英語科教員それぞれの視点から小学校の英語活動として、適切な内容、希望する指導内容や意見を集め、それらを検討したうえでカリキュラムの改訂を行い、その改定後の指導案を基に小学校外国語活動において児童に実践した。2年間を通した積み重ねを重視し、各単元の指導案に目を通せば学級担任がT1として指導ができるように、また日本語が不自由なALTに対し担任の英語による説明が不十分だとしても、英語活動の内容を知り、ティームティーチングの形で進められるように英語での簡単な説明も付加した。指導内容については単元間の関連を強くし、学習した英語を繰り返し扱い、児童への英語のインプット量を多種多様な英語ではなく比較的絞り込んだ英単語や英文を繰り返し用いることで、指導者と児童両者への英語量を調整した。英語活動はゲームをして楽しかったが英語は何をしたのか覚えていない、その場で英語を使ってみただけという活動ではなく、自ら考え英語を発し学習の一部として児童が英語活動を楽しむことを目的とした。これはクラッシュェンのナチュラルアプローチの教授法にある「理解可能なインプット」をできるだけたくさん与えるようにするというに近い。英語活動において1単元3、4時間程度の活動で単語や英文を扱う場合、児童はその場でマネはしてもインプット量としては不十分である。小学校外国語活動ではFLAやSLAの教授法をそのまま取り入れることは、研究

対象の指導時間や環境等が大きく異なることから検討が必要であると考え、外国語を学ぶ場合にインプットが必要なことは小学校の指導でも同じであると考えられる。またインプットだけではなくアウトプットも必要であり、スウェインはアウトプット仮説で「理解可能なアウトプット」が言語習得において必要であると述べている。これは前述したクラッシュェンの「理解可能なインプット」が十分にある前提であり、様々な英文と多くの英語量ではなく、扱う英文を絞り込むことでインプットが「理解可能なインプット」中心となり、それに伴い、単語や文の繰り返し、児童が考えて行う活動のアウトプットも「理解可能なアウトプット」となる。このアウトプットに際し、英語を声に出して繰り返すというシャドーイングも行っている。扱う英文を絞り込んでインプットした内容やキーセンテンスとして取り上げた英文を声に出し繰り返ししており、小学校外国語活動の目的である音声重視という視点からシャドーイングは重要であると考え。シャドーイングは音を集中して聞き取らないと繰り返すことは難しい。母語ではない英語を、しかも母語にはない発音を持つ英語を、シャドーイングを通してより音に注意を向けるように活動を行い、音声を声に出すことで母語に無い音の発音にも慣れていく。

このように今回用いたカリキュラムは小学生という英語の初学者かつ低年齢層への指導として、インプット仮説やアウトプット仮説を中心に作成した。さらにこのカリキュラムでは指導内容だけではなく、指導者の役割を明確にした。学級担任と ALT や JTE の役割を分け、担任の英語使用の負担は英語が苦手な教員は最小限に抑え、無理な英語使用を担任には求めず、その指導回の活動で扱う英文と英単語、そして数を絞り込んだクラスルームイングリッシュについては担任も扱うようにする。このカリキュラム実施に当たり、すべての授業内容について学級担任と補助教員（JTE：伊藤）と打ち合わせを行い、役割分担、指導内容の確認を行っている。

### 3. 2 調査方法

学級担任が T1 として指導をし、JTE が T2 として積み重ね型カリキュラムを用いての指導を実践した小学校において、3 学期終了後の 2011 年 3 月にその年度の 6 年生を指導した学級担任 3 名に対し、学級担任の目から見た指導内容、この積み重ね型カリキュラムを用いることによる気づいた点、指導時間数や教材、前任校との比較等について、半構造インタビューを実施した。調査を行った小学校は東京都内の公立の小学校で、各 1～6 学年がおよそ 100 人前後の学校である。英語活動の時間数は、1～4 年生が年間 8 時間、5、6 年生が各 35 時間である。それぞれの教員には 30 分程度のインタビューを実施し、ビデオカメラを用いて各教員の意見を記録した。教員はそれぞれ教員 6 年目、8 年目、14 年目であり、2011 年 3 月に卒業した 6 年生はどの教員も 5、6 年と 2 学年続けて担任として指導を行った。各教員の担当学年等は表 5 のとおりである。また、インタビューについては次ページに挙げた点について質問をし、それ以外にも小学校外国語活動



についての意見や提言、不安等があれば述べてもらうようにした。

表 5

	教員 1	教員 2	教員 3
赴任校	1 校目	2 校目	3 校目
教員歴	6 年目	8 年目	14 年目
指導学年	2, 5, 6, 5, 5, 6	4, 5, 6, 3, 5, 6, 5, 6	5, 6, 5, 6, 5, 6
前任校英語活動の有無	初任校のため、前任校のデータは無し	あり	あり（前任校のみ、前々任校ではなし）
前任校での指導		自治体全体で指導案（カリキュラム）を共有	ALT が準備
前任校での補助指導員		ALT（外国籍：必ずしも英語母語話者ではない）	ALT（外国籍：必ずしも英語母語話者ではない）
前任校での打ち合わせ		派遣された ALT による（有り無しが混在）	ALT との打ち合わせは無し

A. 現状について

- ① 5, 6 年に実施した積み重ね型カリキュラムについてどう思ったのか
- ② クラスルームイングリッシュを用いることについてどう思ったか
- ③ 実施した研修についてどうだったか
- ④ 6 年生卒業時までには何ができるようになったと思うか
- ⑤ 前任校（研修等での他校見学）との比較

B. 目標について

- ⑥ 担任の視点で、6 年卒業時までには身に付けておきたい英語能力は何か
- ⑦ 担任の視点で、中学の基礎を養うために小学校で何をすべきだと考えるか

C. 今後の課題

- ⑧ システム、指導時間数、開始学年について
- ⑨ 指導内容をどのようなものであると考えるか
- ⑩ 英語活動において担任の役割をどのようにすべきか
- ⑪ 研修はどのようなものが必要と考えるか
- ⑫ その他の意見

#### 4. 結果

小学校外国語活動を進めるにあたって、どのような指導案や英語教材が必要なのかについて各教員からの意見をまとめた。まず今回の実践を通し、どの教員も積み重ねの重要性について言及していた。その中でも特に、前任校や研修等で英語活動を実践し観察

をした他校との比較という観点からの指摘がなされた。児童の英語活動への取り組み方において、活動が進むにつれ積み重ねた知識を頻繁に使用し、児童が英語の内容を理解したうえで新出内容を推測することが多くなった。その際、児童は英文構造を感覚的に身に付け、遊びの英語というだけでなく英語を学習しているという知的欲求を満たしながら活動を行っている様子が見えた、との意見が述べられた。前任校ではほとんどの児童が英語活動は遊びの時間という認識であったのに対し、研究対象校の児童は遊びの中にも学習があると感じた児童が多かった。その一方、児童の中には少数ではあるが前回やそれ以前に何をやったのかと考えるのを面倒に思うような発言や態度があったという指摘があった。また対象校の児童は小中連携の一環として1学期直後に中学校教員からの英語指導を1回体験し、2学期半ばに中学校授業を見学している。その際彼らは中学校で学ぶ英語に対して戸惑いが無かったのに対し、前任校の児童達は中学校の英語学習が始まる際、小学校卒業後の中学校の英語としての勉強に大きな戸惑いを持っていた者が多かったという意見があった。他校における指導内容は積み重ねではなく、全て『英語ノート』のような單元ごとの活動内容であったが、内容の比較においてはバラバラの單元よりも積み重ね型カリキュラムの方が児童にとって非常に有用であるとの評価に加え、指導のしやすさについても意見が出された。5年開始時から各回の指導案とその流れ、そして6年卒業時の目標が掲げられているため、担任側としては指導内容が事前にはっきりと把握しておける。そのため何をするのかわからないという混乱が無く、また担任一人で指導をしなければならない場合も内容に対しての戸惑いが少ない。指導内容についても中学校英語を見据えた内容ということから安心して指導を行える、という意見であった。卒業時の児童の英語力については、英語に慣れ、しっかりと聞き、声に出すということへの抵抗が少なく、また文構造を感覚的に理解するようになり、英文や単語、文法等も含めた英語そのものに興味を持つようになった、と述べている。クラスルームイングリッシュについては数を抑えてあり、大きな苦手意識を持たず英語活動を指導でき、英語が得意な教員については教員の判断でその量を増やしているため、担任が指導する英語活動としては適切な英語量であろうということであった。

特に前任校で指導経験のある教員2名は、学級担任が使用する英語量について合わせて言及していた。前任校では担任も多くの英語を使わなくてはならず、そこで用いる英語が正しいかどうかは重要ではなく、コミュニケーションということから英語を使用し、やり取りを見せることが重要とされてきたが、英語を不得意とする学級担任の1名はこれが大きな負担であり、学級担任が無理に英語量を増やしていることに不安と疑問を感じていた。また英語が比較的得意な別の担任は、英語を担当が多用することは児童に実際に見せるという観点から良いと感じていたが、児童を引き付け、そのやり取りに興味を持つように担任の英語量や扱う範囲について調整することの難しさを述べていた。つまり英語のやり取りを見せたい、体験的に触れさせたいという教員の希望はあるものの、

英語量が多くなり児童が興味を持って聞こうという範囲を超えてしまうようなやりとりや担任の英語使用については、学級担任側、児童側にとっても検討が必要だということである。そのような点からも学級担任の英語負担を絞り込んでいるこの積み重ね型カリキュラムを用いての指導は、児童、教員双方にとっては扱いやすいものであるという評価であった。扱う英語量を絞り込むということは、児童にとっては集中して聞く時間と日本語で少しリラックスして聞く時間とが出来、英語活動における児童の集中度が良かったということも、扱いやすいという教員側からの評価の一つの理由であった。しかし、このカリキュラムの指導案は5、6年生用で計70時間分およそ200ページ、ワークシートを合わせると300ページ近くあり、毎回丁寧に目を通してることが必要とはわかっているものの多忙から難しい時があるとの指摘がなされた。1回分の詳細な指導案はおよそ3ページ程度ではあるが、毎週事前に目を通さなければならず、また最初の数回は授業の実際の流れをつかむために指導案を読んだ上で打ち合わせをして確認をする必要があるため、1ページ程度の簡単にまとめた指導案が欲しいという希望があった。教員によって指導案の希望が異なり、また詳細、簡易版両方欲しいという教員もいて、指導案として作成している指導書はその書き方については今後の検討が必要となった。

また英語研修は4月の新学期が始まる前に1時間程度、夏休み中(7月)に3時間程度行っており、4月は積み重ね型カリキュラムを用いての授業実践の注意点と英語活動における学級担任とJTE(伊藤)の役割について、7月は各学年の指導内容や学級担任の扱う英語の確認、小学校外国語活動におけるゲーム活動等を用いる目的や注意点、英語教育的な面からの検討事項、また教員間の意見交換と質疑応答を行っている。これら研修についてはこのまま毎年実施を続けてほしいということ、クラスルームイングリッシュの指導時間、発音指導と練習の時間、扱う英文の練習時間も研修の中に設けてほしいという意見が出された。研修で指導に必要な英文を練習しておくことで、学級担任がより安心して英語活動を進めることが出来るという意見も出された。

次に、使用しているカリキュラムの中ではフォニックスを導入しており、5年生初めからほぼ毎回の授業で2、3の文字を取り上げている。授業の始めにアルファベットを提示して音を繰り返して確認後、その文字が含まれている単語の文字付絵カードを各文字につき3、4程度提示し、こちらも声を出して確認をする。5年生からの2年間で、アルファベット26字の基本的な音と、‘th’、‘ch’のような2文字の音の読み等、合わせておよそ40程度の文字を2年間で扱い、各文字は1度だけではなく、2年間を通じ復習も混ぜ何度か繰り返して毎回授業の初めに取り上げている。このフォニックスを導入していることもあり、文字の導入について学級担任からもっとアルファベット等の具体的な文字指導を導入してもよいのではないか、という意見が強く出された。国語科のローマ字指導は新学習指導要領では3学年で行われ、パソコンの授業もある。高学年の児童はアルファベットに興味があり、覚えて書けるようになる指導を行うわけではないが、書

く練習をする機会を設けることは必要だろうという意見であった。3, 4年生で触れるローマ字指導は数時間程度であり、アルファベットそのものに慣れる時間としては多くは無い。インタビューの中で、名前カード1つを取ってみても教員が用意するものとしてローマ字か英語どちらで表記をした方が良いのかわからないという意見があった。(例、「つ」音の表記、「tu」または「tsu」) そもそもローマ字と英語表記の違いがどう児童に影響するのか、ということ深く考えて英語活動を行っておらず、英語の名札を全て小文字や全て大文字で書き、ローマ字表記で「つ (tu)」の音を書いても何とも思っていなかったというのが担任の感想である。しかしフォニックスを導入し、アルファベット等に児童が興味を持つ様子を見ると、6年卒業時までアルファベットがある程度分かるころまで小学校で指導してもよいのではないかと考えるようになった、ということである。フォニックスで扱う単語を書いてみたい、そのプリントや宿題が欲しい、もっと文を文字で見てみたいという児童がいる一方、文字を使用することがほとんどない仲間さがし等やカード合わせ等の活動が良いという児童もいて、小学校で導入はしても全て覚えるというところまでは難しいというのが3名共通の意見であった。そのため、アルファベットの指導に関しては中学のように書かせて覚えさせることが中心の座学だけではなく、フォニックスも含めた声に出す活動、カルタやゲーム等、小学校だからこそ扱える活動と指導が用いられれば小学校でも指導ができ、このような活動であれば児童にとっては負担ではなく、興味から来る英語活動の遊びの延長として進めることが可能だろうということである。小学校では、英語を声に出すことに慣れる、英語を聞くことに慣れる、「ありがとう」、「おはよう」等の英語の基本的な挨拶が聞き取れスムーズに声に出して対応でき、アルファベットがある程度わかり、そして“I play～.”, “I like～.”のような2, 3の英語の基本的な構文が感覚的に身につくことが、中学の基礎に向けて小学校で扱う英語であるとよいということであった。これらの意見はこの積み重ね型カリキュラムを実施したからこそであり、他校での指導内容や『英語ノート』そのままの指導内容ではこのような意見には至らなかった、という感想も合わせて出された。

そして今後の指導内容としては、この積み重ね型カリキュラムのような指導書を他校でも実施し、小学校間で同じカリキュラムでの英語活動の実施が望ましいという意見が出された。この系統立てたカリキュラムであれば、学級担任が T1 として指導するのに大きな混乱や難しさは少なく、ALT や JTE と打ち合わせ時間が取れなくても指導内容の確認ができ役割分担もあるため教員が直前まで指導内容を知らずに困ることはない。指導時間数や開始学年については、教員間で意見が分かれており、このカリキュラムならばもっと時間を増やし低中学年も指導時間を多くして英語活動を進めたいという意見と、今のカリキュラムのバランスが良いため、現状のままの時間数や開始学年でよいとする意見にわかれた。そして学級担任の役割としては英語を多用するのではなく、担任は日本語で英語活動の指導を行い担任の英語についてはターゲットの英文や単語、クラスル

ームイングリッシュを扱い、それ以外も含め音声に関しては CD や音声教材、補助教員が担うのが良いとした。

## 5. まとめ

小学校外国語活動が 2011 年度から高学年へ必修化し実施され、副教材が配布されている中、指導する立場にいる学級担任がこの英語活動をどう感じているのか、指導内容、指導者、また英語活動において何が必要だと感じているのかについて、高学年を受け持った学級担任 3 名へのインタビューから T1 として指導する学級担任の意識と意見をまとめた。その中で、今後の小学校外国語活動では中学につながる英語教育としての英語の指導内容をはっきりと持っていきべきだということが提言された。学習指導要領にあるように、主たる指導者は学級担任であり、それが ALT や JTE 等の補助教員でないのであれば、英語活動はその学級担任の意見をもっと取り入れ、彼らが指導しやすいように指導内容も含めて検討する必要がある。今回インタビューを行った教員は、英語教育に携わる人材が小学校教員や中学校教員の意見を取り入れた上で英語教育をしっかりと考慮したカリキュラム作成することが重要であり、そしてそれを実施していくことが教員の実感として非常に重要だということを述べていた。今後はこの積み重ね型カリキュラムの内容や仕様をさらに検討し、またこの英語活動を体験して卒業した 6 年生へ追跡調査を行い、積み重ねではない英語活動を体験した生徒とのその後の中学校英語の比較を調査する予定である。小学校外国語活動は学校の中で英語に触れて遊ぶということだけで完結するものではないと考える。小学校外国語活動が中学以降に続く英語教育の大きな流れの中のスタートとなるように、今後もこの積み重ね型カリキュラムの調査を継続していく予定である。

## 参考文献

- アレン玉井光江 (2010) 『小学校英語の教育法 -理論と実践-』 大修館書店
- 岡秀夫・金森強編著 (2009) 『小学校英語教育の進め方 ことばの教育として[改訂版]CD付』成美堂
- バトラー後藤裕子 (2008) 『日本の小学校英語を考えるーアジアの視点からの検証と提言』三省堂
- 樋口忠彦 編著 (2010) 『小学校英語教育の展開 -よりよい英語活動への提言-』 研究社
- Benesse 教育研究開発センター (2011) 「第 2 回小学校英語に関する基本調査(教員調査)」 Benesse Corporation [http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo\\_eigo/2010/index.html](http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2010/index.html)
- 文部科学省 (2012) *Hi, friends!1*
- 文部科学省 (2012) *Hi, friends!2*
- 文部科学省 (2012) 『*Hi, friends!1* 指導編』
- 文部科学省 (2012) 『*Hi, friends!2* 指導編』
- 文部科学省 (2009) 『英語ノート 1』

文部科学省 (2009) 『英語ノート 2』

文部科学省 (2009) 『英語ノート指導資料 1』

文部科学省 (2009) 『英語ノート指導資料 2』

文部科学省 (2008) 『小学校外国語活動研修ガイドブック』 旺文社

文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 東洋館出版社

Richards, J.C., and Rodgers, T. S. (2001) *Approaches and Methods in Language Teaching*. Cambridge University Press.

Cameron, Lynne (2001) *Teaching Languages to Young Learners*. Cambridge University Press.

Harmer, Jeremy (2007) *The practice of English Language Teaching*. Pearson Education Limited.

## Appendix 1 『英語ノート』と *Hi, friends!* における各章のタイトル英文

表 1 英語ノート 1

L1	Hello!	世界の「こんにちは」を知ろう
L2	I'm happy.	ジェスチャーをしよう
L3	How many?	数で遊ぼう
L4	I like apples.	自己紹介をしよう
L5	I don't like blue.	いろいろな衣装を知ろう
L6	What do you want?	外来語を知ろう
L7	What's this?	クイズ大会をしよう
L8	I study Japanese.	時間割を作ろう
L9	What would you like?	ランチメニューを作ろう

表 2 英語ノート 2

L1	That's right.	アルファベットで遊ぼう
L2	Aa Bb Cc	色々な文字があることを知ろう
L3	When is your birthday?	カレンダーを作ろう
L4	I can swim.	できることを紹介しよう
L5	Turn right.	道案内をしよう
L6	I want to go to Italy.	行ってみたい国を紹介しよう
L7	What time do you get up?	自分の一日を紹介しよう
L8	Please help me.	オリジナルの劇を創ろう
L9	I want to be a teacher.	将来の夢を紹介しよう

表 3 *Hi, friends!* 1

L1	Hello!	世界のいろいろな言葉で挨拶しよう	言葉・挨拶
L2	I'm happy.	ジェスチャーをつけて挨拶しよう	ジェスチャー、感情・様子

L3	How many?	いろいろなものを数えよう	数、身の回りの物
L4	I like apples.	好きなものを伝えよう	果物、動物、食べ物、スポーツ
L5	What do you like?	友達にインタビューしよう	色、形
L6	What do you want?	アルファベットを探そう	アルファベット大文字、身の回りの物
L7	What's this?	クイズ大会をしよう	身の回りの物
L8	I study Japanese.	「夢の時間割」を作ろう	教科、曜日
L9	What would you like?	ランチメニューを作ろう	料理

表4 Hi, friends! 2

L1	Do you have "a"?	アルファベットクイズを作ろう	言語、文字
L2	When is your birthday?	友だちの誕生日を調べよう	行事、月・日付
L3	I can swim.	できることを紹介しよう	スポーツ、動作
L4	Turn right.	道案内をしよう	建物、道案内
L5	Let's go to Italy.	友だちを旅行にさそおう	世界の国々・生活
L6	What time do you get up?	一日の生活を紹介しよう	世界の国々・生活
L7	We are good friends.	オリジナルの物語を作ろう	世界/日本の童話
L8	What do you want to be?	「夢宣言」をしよう	職業、将来の夢

## Appendix 2 年間指導計画

### 5年生年間指導計画

目標	自己紹介のやりとり、かんたんな意思疎通が出来るような基本会話、母国語とは異なる言語にふれ、日本語や外国との文化等の違いを織り交ぜながら、英語活動を楽しむ。
内容	英語の土台(基礎的な部分)について簡単なやり取りやゲーム活動、体験学習を通してながら触れていく。どのように意思を伝えることができるか自らが考えながら授業を進める。
1	挨拶、挨拶のやり取り 1、時間帯による挨拶の変化 (Hello, Good morning/afternoon/evening)
2	挨拶、挨拶のやり取り 2、やり取りが長くなった挨拶
3	自己紹介。 I am ～. (名前、性別、年齢)
4	I と You I am ～. You are ～. hungry, tired, sleepy 等の形容詞
5	I と You hungry, tired, sleepy 等の形容詞 Are you ～? Yes, I am. / No, I am not. の文
6	『英語ノート』,CD の活用：外来語を知ろう 1 (p36-38) 国旗と食べ物
7	外来語、I want ～. I am ～. (hungry, sleepy 等) 自分の状態と欲しい物を伝えるゲーム。
8	外来語、I want ～. You want ～. Do you want ～? 同じ物が欲しいかを聞くインタビュー。
9	『英語ノート』,CD の活用：外来語を知ろう 2、国旗と食べ物：What do you want?
10	外来語、I want ～. You want ～. Do you want ～? What do you want? インタビューゲーム
11	状態形容詞、Are you ～?, I/You want ～. Do you want ～? What do you want? 会話ゲーム。

12	『英語ノート』、単数、複数の復習 I like ～. Do you like ～? の表現、果物、スポーツ名など
13	『英語ノート』、食べ物、スポーツ名など I like ～、Do you like ～? の表現 2
14	スポーツ名、教科名、など インタビューゲーム I like ～、Do you like ～? の表現 3
15	動詞を使った文 1 スポーツ、教科名 I like ～. Do you like ～? Yes, I do. /No, I don't.
16	動詞を使った文 2 have/like を使う。I like ～. I don't like ～. /I have ～. I don't have ～.
17	紹介文 1。食べ物 This is ～. I like ～. /I don't like ～. カード交換ゲーム
18	紹介文 2。食べ物 This is ～. What do you want? I want ～. 何が欲しいか尋ねる。
19	動詞を使った文 (肯定文) 動詞 eat、食べ物 I eat ～. 同じカードを持っている仲間を捜す
20	動詞を使った文 動詞 eat、食べ物 Do you eat ～? Yes, I do. No, I don't. カードゲーム
21	動詞を使った文 動詞 play 1、楽器 I play the ～. Do you play ～? Yes, I do. No, I don't.
22	動詞を使った文 (肯定文、疑問文、否定文) 動詞 play 2、スポーツ
23	動詞を使った文 (肯定文、疑問文、否定文) 動詞 play 3、スポーツ
24	曜日と動詞 (いろいろな動詞、放課後や週末等の活動表現) I play soccer on Sunday.
25	曜日と動詞続き (質問形式) 曜日、Do you play soccer on Sunday? Yes, I do. /No, I don't.
26	動詞を使った文 (肯定文) 動詞 go、場所 I go to ～. I don't go to ～. カードゲーム
27	動詞を使った文 (肯定文、疑問文) 動詞 go、場所 インタビューゲーム
28	アルファベットゲーム大会 大文字、小文字を使って、アルファベットのゲームをする。
29	曜日、教科名 1、Study, I study English on Friday. 表現を楽しもう! (文の組み合わせ)
30	教科名と曜日 2。時間割について。一般動詞 "study" "teach" を用いた表現。BINGO
31	教科の復習 3。科目名と曜日。時間割について。I don't study English on Wednesday.
32	教科の復習 4。科目名と曜日。When do you study English? I study English on Monday.
33	教科の復習 5-1。科目名と曜日。自分たちで時間割りを作成し発表する。
34	教科の復習 5-2。前時に作成した自分たちの時間割りを用いたゲーム。
35	1年のまとめ。(時間調整含む) ミニゲームで様々な英語表現を思い出してみる。

#### 6年生年間指導計画

目 標	英語で自分の考えを相手に伝えるという体験を通し、英語のスキルだけではなく、相手との意思の疎通や意思の伝達の重要性を体験し、言葉の大切さを理解する。
内 容	簡単な文構造を理解した上でゲーム等の活動を楽しみ、英語の内容を理解しながら知的好奇心にあった内容を通して、中学校での英語へと繋がる目標ある活動を行う。
1	時間表現 What time is it? It is ～. とその会話
2	Be 動詞を用いた時間の英語表現の発展。数字 1-60。分の単位までの時間表現。
3	動詞 (go to school/bed 等) 都市、国旗 (国)、時間表現の復習。CD の聞き取り
4	時間表現の復習と発展 I ～ (動詞) at ～ (時間) . (go to school/bed 等) 発展した会話 1



5	時間表現の復習と発展 Do you ~ at ~? Yes/No. I ~. (go to school/bed 等) 発展した会話 2
6	時間表現の復習と発展 What time do you ~? I ~ at ~. 発展した会話を楽しむ 3
7	動詞の復習 like, swim, fly, sing, play, I can ~. I can't ~ (動詞) . の表現、
8	動詞の復習 like, swim, fly 等、I can ~. I can't ~ (動詞) . (復習)、Can you ~? の表現 1
9	動詞の復習 like, swim, fly 等、I can ~. I can't ~ (動詞) . (復習)、Can you ~? の表現 2
10	動詞の復習 like, swim, fly 等、I can ~. I can't ~ (動詞) . (復習)、Can you ~? の表現 3
11	動詞の復習 like, swim, fly 等、I can ~. I can't ~ (動詞) . (復習)、Can you ~? の表現 4
12	国旗と国名、色々な名詞 動詞 like, play, eat, go, see と名詞 (目的語) の組み合わせ
13	I want ~ (欲しい物) I don't want ~. Do you want ~? Yes, I do. No I don't.
14	国名。単語 (p.39) I want to go ~. 国旗でカードマッチゲーム、
15	I want to see ~. 場所でグループング (仲間集め) ゲーム、CD を聞く (『英語ノート』)
16	食べ物 I want to eat ~.
17	I want to go/see/eat の復習。国旗、場所、食べ物を混ぜて I want to go/see/eat ~で Bingo
18	I want to want go/see/eat の復習。Do you want to ~ (want to go/see/eat) ? インタビューゲーム
19	I don't want to 動詞否定文、動詞 (want go/see/eat/play)、やりたいこと、やりたくないこと。
20	いろいろな職業を知ろう。なりたい職業の紹介 1 I am ~. Are you ~? Yes, I am./No, I'm not.
21	いろいろな職業を知ろう。なりたい職業の紹介 2 I want to be a ~. カードゲーム、
22	わたしは~ (職業) になりたいです。I want to be a ~. I don't want to be ~. CD で聞き取り
23	Do you want to be a ~? Yes, I do./ No, I don't. インタビューゲーム。
24	What do you want to be? I want to be a ~. カードゲーム。
25	What do you want to be? I want to be a ~. I want to ~ (動詞) . インタビューゲーム 1
26	What do you want to be? I want to be a ~. I want to ~ (動詞) . インタビューゲーム 2
27	アルファベットカード大会 大文字、小文字を使って、アルファベットのゲームをする。
28	復習 (職業名、I want to be a ~. Do you ~? What do you want to be?) 月名
29	自分の誕生日の紹介 序数と日付の表し方
30	誕生日の紹介 2 序数と日付の表し方 When is your birthday? インタビューゲーム
31	自己紹介カードを作ろう。 (行きたい国を調査する。(後で国旗を貼る))
32	自己紹介 1。自分の夢の発表。~したいという英語表現のまとめ。
33	自己紹介 2。自分の夢の発表。~したいという英語表現のまとめ。前回の続き
34	自己紹介 3。自分の夢の発表。~したいという英語表現のまとめ。前回の続き
35	自己紹介 4。自分の夢の発表。~したいという英語表現のまとめ。

